

## ニホンナシ「幸水」のトンネル栽培における 年1回施肥法

近年ナシでは、樹勢低下や着花不良等のため単位面積当たりの収量の低下が問題となっています。そこで、効率的に吸収される肥効調節型肥料を活用して、樹勢強化による安定生産を図るとともに土壌から溶脱する硝酸態窒素を少なくする施肥体系を開発しました。

### ☆ 技術の概要

1. 草生栽培における肥効調節型肥料の溶出率は、地表面施用と地中施用（深さ10cm）で差が少なく、草生栽培で肥効調節型肥料の地表面施用が可能です（図1）。
2. 6～8月の葉中窒素含量は、肥効調節型肥料区（8割量施用）と対照区（県基準量施用）は同等で（図2）、収量、果実品質も対照区と同等です。
3. 肥効調節型肥料による年1回施肥で、樹勢の安定が図られるとともに、施肥労力の省力化が可能です。また、年間窒素投入量も県基準の8割量となるため土壌からの硝酸態窒素の溶脱を少なくすることができ、環境負荷が軽減されます。

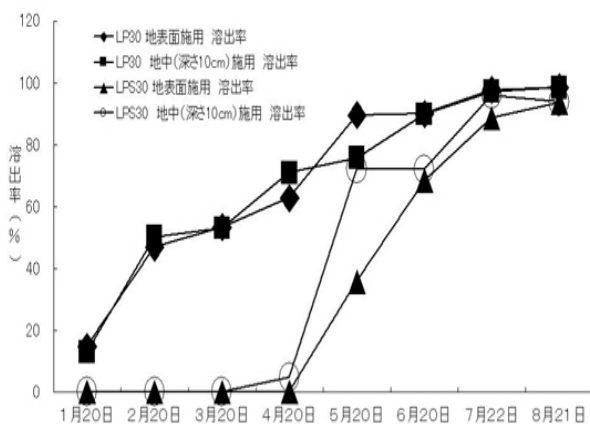


図1 地表面施用と地中施用における溶出率

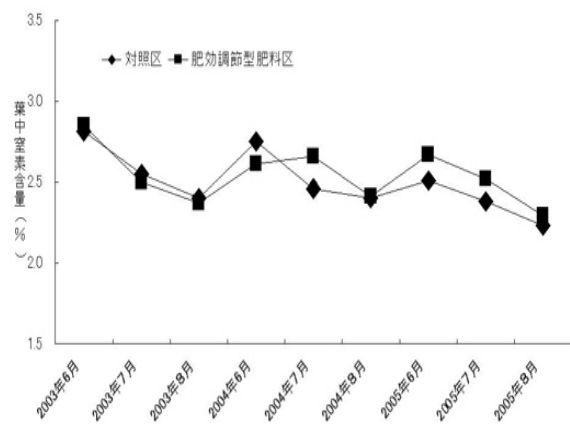


図2 葉中窒素含量の推移

### ☆ 活用面での留意点

肥効調節型肥料施用の場合、土壌が過乾燥のときは窒素の溶出やその根群域への浸透が遅れるのでご注意ください。減肥の割合は、堆きゅう肥施用の有無、その種類、施用量並びに土壌診断結果に基づき決定します。肥効調節型肥料の窒素溶出速度は地温に強く影響されるので、11月下旬の施用時期を厳守します。

その他詳細については、熊本県農業研究センター・果樹研究所・病虫化学研究室（TEL：0964-32-1723）までお問い合わせ下さい。

（農研機構果樹研究所 企画管理部 研究調整役 別所英男）